

付録② フレージングとは何か？

《燕のジョー氏の解説より引用》

さて、今回は、デモ、競技会の足型、生徒の紅白戦用ステップを作る等の際に、ダンスと関係のある音楽の基礎知識を学びましょう。小中学校時代に習っていても忘れていたり、興味がなく全く習得していない方も多いかもかもしれません。年配の協会員の中には、音楽をゆっくり楽しむという風潮が昔はなく、音楽の基礎知識も勉強した事がなかったり、自分が習った事のあるギターや、ピアノ等の楽譜なら何とか読めるけれど、ルンバ等の音楽が何拍子でどこにアクセントがあるのかは全然判らないという方もいらっしゃるかと思われま。逆に若い先生は、携帯ツール等に音楽を取り込んで日常多くの時間、音楽を聞いたりすることは多くとも、なかなか楽譜を読む事は出来ない方もいらっしゃるのではないのでしょうか？今は時代が進みネットなどで検索すれば、音符などについても勉強できるサイトが一杯ありますが、そのために一々検索するのも結構面倒臭いモノです。そんな時には冷たい飲み物と一緒にこのコーナーをご一読下さい。

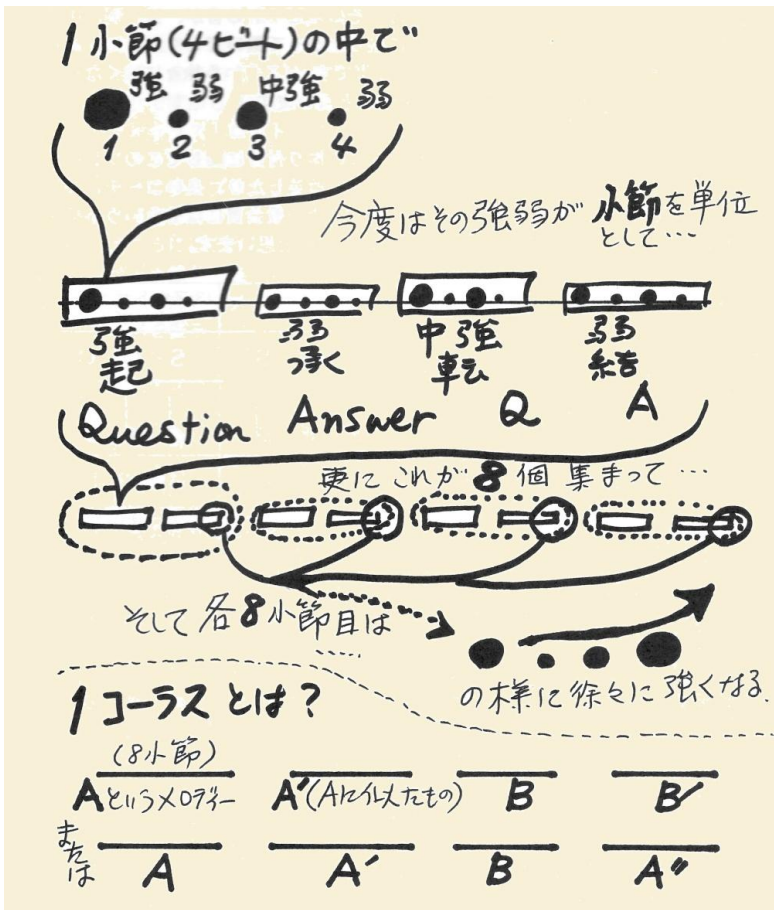


さて、先回の第1回目では、3/4拍子とか、4/4拍子等の勉強をしました。今回は少し、ダンス的な専門の話になりますが、足型と関係の深い『フレージング (phrasing)』(=各ビートのみではなくて、各ビート各小節の強弱にまで発展して、足型を振り付ける事) に関して少し解説して参りたいと思います。

『フレージング』という事について

フレージングというのは、フレーズ (phrase=文法の言葉で『句』、又は音楽の『楽句』という意味) の ing 形でフレーズするという事ですが、これは一種ダンスに関する専門用語で、しかも造語のようなものであり、音楽の小節に合う様に、足型等を振り付けるという事です。例えばトップ選手やチャンピオンのデモ等をご覧になった時に、非常に良く音楽に合っているとか、音楽を表現していると感じたり、そういう事を解説者が説明したり

するのをお聞きになった事があるでしょう。彼らが踊る時、音が外れてない=単純に各一拍一拍のビートに合うのは当然ですが、以下に説明する様に、いわば、各小節毎にも音の強弱 (小節の強弱) に合う様にも計算し、デザインして振りつけているのです。別の言い方をすれば、例えばタンゴなどは4拍子 (前回の拙稿では2拍子と解説してありますが、最近では4拍子の楽譜も多いそうなので、今回は4拍子と考えます。どちらもOKです。) で、4拍子の音楽の場合、各ビートの強さは、強、弱、中強、弱となります。(もし、強、弱、強、弱となったら、第1拍目と第3拍目の区別が不要になるので、この場合は2拍子となります。) そしてこういう強弱は、小節を一単位とした場合に於いても同様で、4小節をひとまとまりに考えた場合、各小節単位で、強、弱、中強、弱となります。これらを起承転結と言ったりもします。4コマ漫画みたいですね。(一度ワルツやタンゴのダンス曲をかけて、じっくり聞いてみて下さい。例えば有名なタンゴの名曲『ラ・クンパルシータ』では、前奏の4小節が非常に明確で、強、弱、中強、弱という風にはっきり理解できる事でしょう。) 各ビートではなくて、小節毎にもこういう強弱があるという事を認識しましょう。



れませんが、これは音の強弱と言うよりも、『メロディーの強弱』と『相似』の様なものです。とにかく判り易い例としては、前述の『ラ・クンパルシータ』の前奏です。この4小節は、最初の4小節 (最初の4ビート) が一つの短いメロディー (と言うか短いので、メロディーを構成する一つの細片ですね) を提示し、2小節目はあたかもそ

のエコーや反響であるが如く（英語では、これを **Question & Answer**、即ち『質問とその回答』などと言ったりします。）多少そのメロディーを変えた、第1小節目の類似メロディーを充当します。そして次の3小節目は、場面が異なった様に少し最初とは違うメロディーをもって来て、最後の4小節目は、最初同様その類似メロディーになります。（一番一般的なパターンのお話ですが、そんな訳でこれを起承転結と言ったりもします。）

身近で判り易い例としては、カム&ダンスやダンスマイライフに収録されている標準のダンス曲を見て（聴いて）みましょう。通常小節数として、タンゴ、ワルツ、スロー フォックストロット、ルンバ、チャチャチャ等は **4+64** 等という風に、CD ケース等に表示されています。この意味はお判りでしょうか？これは前奏4小節とその後2コーラス分の本演奏があり、合計68小節あるという事です。通常のダンス音楽に於いては1コーラスは32小節と思えば良いでしょう。（1コーラス=16小節と考える音楽や場合もあります。）歌謡曲などで言えば、これが丁度歌の歌詞の1番の長さ分なので、この様に1コーラスと言うのです。そして、ダンス音楽の名著である、ペペ&カルメンの鈴木俊夫氏による『ダンス音楽のABC』にも詳密に解説されていますが、通常この1コーラスは $4 \times 8 = 32$ から判る様に、8小節分をひとまとめにしたメロディーが、4つ集まって構成されており、この一つ分の単位となる8小節は、先に解説した様な、起承転結としての4小節の2つ分から成り立っております。そして更にこの大元の8小節が一つの新しい単位となり、以下の様に展開していきます。即ち；この4つは、最初の8小節が一つのメロディーを提示し、次の8小節はあたかもそのエコーや反響であるが如く（先述の如く **Question & Answer**）多少そのメロディーを変えた、似た感じのメロディーを充当します。そして次の3番目の8小節ひとまとまりは、場面が異なった様に少し最初とは違うメロディーをもって来て、最後の8小節は、一番最初のメロディーの変形かもしくは、3番目のメロディーの似たモノが演奏されます。つまり丁度先程の、4小節の構成が、そのまま今度は、各小節単位ではなくて、8小節のまとまりを一つの単位として、前述の様に強、弱、中強、弱や、起承転結のパターンになるのです。（ちょうど原子の世界が太陽系の構造に拡大されるが如くです。）そして特筆すべき事で、多分皆様にもほとんど知られていないと思われる事があります。これもやはり『ラ・クンパルシータ』などで確認して頂くと最も明確なのですが、この8小節ずつのまとまりの一番最後の第8小節目は、その4ビートの音が、強、弱、中強、弱ではなくて、**強、弱、中強、強**という風に、次の8小節に盛り上がって繋いでいくために、あたかも坂道を駆け上がるかの様に、徐々に強くなっていくという事です。（こういう徐々に強くなっていく強弱の付け方を、専門用語で「クレッシェンド」 **crescendo** と言います。）さて、次に、例えば具体例で、今一番新鮮な新シルバー級タンゴの振り付け（編集部註：知らない人ごめんなさい！！）に関してこのフレージングがどの様になされているかを見てみましょう。選手の方などは渡英したり、良いコーチについてそういうフレージングの知識も豊富でしょうが、昔の方（失礼！）や一般会員にはそういう事柄を学ぶ機会が殆どないと思われるので、この機会に判り易く解説したいと思います。

ステップ名	(1) 2ウォーク&プログレッシブリンク		(2) オープン プロムナード		(3) アウトサイド スウィブル&タップ		
カウント	SS	QQ	S	QQS	SQQ		
音符であらわすと… (*1)	この部分のみ後で手書きで加えます。						
小節を意識した数字でのカウント (*2)	1234	2234	3234	4234			
ステップ名	(4) フォーラ ウェイ リバース&スリップピボットの3歩	(5) 右足のバックチェックから左足後退右ピボット	(6) 右足前進して、セムフット ランジ	(7) ハーフ・テレスピンからターニング5ステップ			
カウント	QQQ	Q	S&	QQ	S	&QQ	QQS
音符であらわすと… (*1)	この部分のみ後で手書きで加えます。						
小節を意識した数字でのカウント (*2)	5234	62&34	72&34	8234			

*1. この様にカウントとピッタリ合致している音楽など普通は無いので、例えば「足型のカウント通りに音符を配置する」とこうなるという例としてご認識下さい。それから、この場合は4/4拍子で書いてあります。もし2/4拍子にしたい場合は、4分音符を全て8分音符に書き換えればOKです。

*2. この様にフレージングする時は、①234、②234、という風に数えると、今何小節目の何ビートかが判るので、選手やコーチは足型のカウントをする場合にも、しばしばこういう数え方をします。

上の表の様に、最初の2ウォークから、アウトサイド スウィブルまでが丁度4小節で区切り良く振りつけられ、

更に次のフォーラウェイ リバース&スリップ ピボットの 3 歩からのバリエーションっぽい部分も、ターニング・ファイブ・ステップでシュパッと PP になる所までが丁度 8 小節目の終わりという風に、きちんと整えて振り付けられているのです。更に次からの部分も、どうぞご自分で調べになってみて下さい。如何に 8 小節（又は 4 小節）毎にきちんと、足型が構成（配列）されているかが判るでしょう。しかし上記の様になっていると説明されても、どこがどういう風に整えられているか判りにくいかもかもしれません。それでももう少し簡単な例でご説明申し上げます。例えば、生徒さんとの紅白戦などのために、『ウォーク&プログレッシブ リンクで中央斜めに PP になり、プロムナード リンクでクローズド ポジションにして、そこからフォーラウェイ リバース&スリップ ピボットで始まる、長いリバース系の連続回転の足型』…そんなステップを作成する事を仮定します。するとまず、ウォーク&リンクは、上記の表からも判る通りで、Q が 6 個分ですから、これだけでは 1 小節半と半端になります。なので次のプロムナード リンクの第 1 歩目は、小節の途中の第 3 拍目からの出発となり、ややインパクトに欠けますが、ま〜取り合えずよしとして踊れば、プロムナード リンクは SQQ で Q4 個分ですから最初からの合計が 2 小節半となり、また小節をまたぐ結果になり、次のフォーラウェイ リバース&スリップ ピボットも小節の途中からのスタートになってしまいます。しかしフォーラウェイ リバース&スリップ ピボットはやはり長い左回転の始まりですから、できれば、小節の第 1 拍目の強拍に合わせたいところです。元々タンゴやスロー フォックストロット、クイックステップは足型が小節に対して『非固定』なので、何かまとまったステップを踊ったとしても、スパッと整数分の小節になる保証は何もありません。現に上記のウォーク 2 歩〜プロムナード リンクまでは、“2 小節半”という半端になってしまいます。（こういう非固定に対して、ルンバ、ワルツ、チャチャチャ等は小節に対して固定式です。）ではこの半端を解消するにはどうしたら良いかと考えると、半端になっている大元の原因はそもそも、ウォーク 2 歩は 1 小節分で良いのですが、リンクが Q2 個なので半端になる訳です。そこでリンクの代わりにフォー ステップ（ファイブ・ステップは又々半端になる。）を用いるか又は、リンクをした後に、シュパッと頭部を振る“ファン”という足型を入れれば、足りない Q2 個分を補充する事ができ、次のプロムナード リンクと、フォーラウェイ リバース&スリップ ピボットは両方とも、強拍の第 1 ビートから出発できます。要するにこういう調整仕事がフレージングなのです。例えば競技会やデモ用に左回転の長いルーテン（大概是ピクチャーポーズなどで終わるタイプ）を作ったとしても、キチンと数えてみないと 4 小節の倍数になっている保証は全くありません。勿論小節数が半端でも、各ビートに合って踊れば、音楽には合いますが、4 小節毎にきちんと振り付ければ、小節の強弱や、起承転結にもピッタリ合う（又、合う様に各部分を強弱をつけて踊る）ので、そうしている踊り手は、見た時に更に数倍、数段音楽にマッチして見えるのです。

さて、ここまでの解説で少しお判りになって頂けたかと思いますが、こういう風に新シルバー級は一見ただけでは分からない部分までも、作成された先生方（技術部…船越義勝先生、福井建二先生、浜野義広先生、青山成之先生、監修として山中憲一先生、柘植よしひろ先生）の努力や緻密な計算、デザインが行き届いた素晴らしい足型に仕上がっているのです。技術部の素晴らしい先生方に感謝感謝です。もちろん去年の新ブロンズや、以前の各級も数年前に改訂されたモノからは、こういうフレージングをはじめ、色々よく見える工夫が随所になされている訳です。もちろん船越先生作成のクイックステップも素晴らしくフレージングされていますし、ラテンのフレージングは多少異なりますが、よく音楽に合う様に作成されています。

【注意】フレージングというのは、音楽の専門用語として、使われますが、ダンスでいうフレージングは、もっとマイナーな意味なので、辞書やネットで検索しても出て来ません。音楽でフレージングという場合は、『音符の棒読みではなくて、それらを強弱や演奏の仕方、節目をつけ、区切る事』という意味なのですが、ダンスの場合は、いわば『ダンスが棒読み（棒踊り?!）にならない様に、音楽の小節のまとまりと関連付ける事』とも言えましょう。